

高橋竹山 没後二十年



津軽のカメラリ 高橋竹山

津軽のカメラリ

視力を失い、唯生きる為に
三味線と共に彷徨った
高橋竹山と

苦難の世を渡った
名もなき北東北の
人々の魂が
三弦の音色とともに蘇る。

出演
初代 高橋竹山

監督・製作・撮影・編集

大西功一

「スケッチ・オブ・メモリー」

共同プロデューサー | 明山堂 音楽 | バスカル・プランティンガ

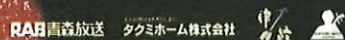
出演 | 初代 高橋竹山、二代目 高橋竹山、高橋哲子、西川洋子、八戸竹清、高橋栄山、初代 須藤雲栄、高橋竹童 他

企画 製作 | 大西功一映像事務所 題字 | 間山陵行 タイトルCG | 嶋津徳高

特別協賛 | 青森放送株式会社、宗教法人松録神道大和山、タクミホーム株式会社、田澤昭吾、竹勇会、藤田葉子、謡楽堂

配給 | 太秦 アザイン | なりたいつか 写真 | 葛西裕晴

© 2018 Koichi Onishi, 2018 | 日本 | 104分 | DCP | モノクロ・カラー | 下キュメンタリー



www.tsugaru-kamari.com

津軽三味線の巨星

故初代 高橋竹山。

明治に生まれ、幼少期に煩った麻疹が元でおよその視力を失う。北東北の過酷な環境の中、庶民の暮らしは貧しく、福祉もまだ整わない時代、唯生きていく為に三味線を習い、門付けをしながらかく食同然に彷徨った。生前、竹山は「津軽のカマリ(匂い)がわきでるような音をだしたい」と語っている。彼を産み、視力を奪い、蔑み、また命の綱となった三味線を授けた恨めしくも愛おしいこの土地に初代竹山は終生拠点を置き、津軽の音を探し続けた。

それを聴けば
津軽の匂いが
わきでるような
そんな音を
出したものだ。

映画は、残された映像や音声、生身の竹山を知る人々の言葉を拾いながら、彼の人生や心模様を呼び覚ましていく。また、この地に今も残る風習や文化、その背景に潜む受難の時代を生きて、死んでいった名もなき人々にも眼を向け、竹山の音に繋がるであろう津軽の原風景を浮き彫りにしていく。

この映画のもう一人の主要人物、

二代目 高橋竹山。

師、初代竹山に見込まれ、長く付従い、1997年に襲名をした女性三味線演奏家である。しかし、津軽では彼女を認め、竹山と呼ぶ人は少ない。襲名以来、青森市での単独コンサートは一度も開かれてこなかった。

映画の中で、二代目はかつて師とともに訪れ、戦争に命を奪われた多くの人々のことを知るに至った沖繩や、師が旅芸人時代に大津波にあい、命の危険にさらされた三陸野田村などを巡り、初代竹山を再確認していく。そして、かつて内弟子時代を過ごした津軽に久しぶりに帰り、師の墓前に花を手向ける。再び師と向き合った二代目は、襲名後、初となる青森市内での単独コンサートに臨み、目の覚めるような素晴らしい三味線の音を響かせるのだ。



「スケッチ・オブ・ミュージック」から6年。映画作家大西功一最新作 沖繩宮古諸島の老人達が記憶する古代の唄とかつての島の暮らしに焦点を当てたその前作は、2019年に公開され、3万人もの観客を動員した。

人々の暮らしと音楽を辿る旅は今作、北国に向かつて大きく舵を切る。そのきっかけは19年前、鈍行列車に揺られ東北各地を巡る中、北上し行き着いた津軽半島北西部の日本海岸にある十三湖。その強い悲しみを湛えた情景が忘れられずにいた。その後に出会う竹山の子孫や弟子達との縁から、本映画の構想を得る。そして、2015年の春より約2年の撮影期間と約1年の編集期間を経て、前作を凌ぐ新たな作品を紡ぎあげた。津軽三味線奏者初代 高橋竹山の生涯、彼の記憶は音色として、そして津軽三味線という北東北の生業としていまも息づいている。

津軽

2023 **4.3** (月)
『津軽のカマリ』
鳥取上映会

前売り 1,500円/当日 1,800円

会場
パレットとっとり
市民交流ホール
(鳥取市弥生町323-1)

17:30 開場
18:00 竹山流津軽三味線ライブ
(演奏…高橋崇水、信清崇月)
18:30 映画上映 (104分)
大西功一監督トーク

申込・連絡先: 090-3428-1083 (信清) Mail:nobukiyoeigetsu@gmail.com